東京方言格助詞「を」の使用に関わる言語的諸要因の数量的検証

松田謙次郎

キーワード：格助詞「を」，自然談話，動詞と目的語の隣接性，情報性，代名詞

要　旨

現代東京方言格助詞「を」の変異について，これまで主に内省に基づいて提案された言語内的要因を取り上げ，自然談話の統計的分析を通してそれらの有効性を検証した。取り上げた仮説は（1）隣接性の仮説，（2）目的語名詞句の名詞・代名詞差，（3）名詞句の情報性である。東京語生え抜き話者37名とのインタビュー資料から得た7,529件のデータにロジスティック回帰分析を施し，次の知見を得た。（1）隣接性は大きな制約として機能するが，非隣接の場合間にどのような要素が入るのかは関係ない。ここからTsutsui（1984），Saito（1985）の仮説は支持されるが，Saito（1983）の仮説は破棄される。（2）語彙名詞・代名詞別はゼロ化に関わり，Hosaka et al.（1992）の仮説は裏付けられる。（3）情報性が「を」のゼロ化に関わるというMasunaga（1988）の仮説は破棄される。

0.　はじめに

現代東京方言格助詞「を」が，自然談話中で使用と不使用（以下「ゼロ形」と呼ぶことにする）の変異を示すことは周知の通りである。この変異を左右する要因には，大別して性，都内居住地域，談話スタイルなどの社会的要因と，文法的諸環境を含む言語内的要因があることについては，筆者もかつて論じている（Matsuda 1995）。本論文は，このうち言語内的要因に的を絞り，これまで主として内省に基づいて提案されてきた主要因を取り上げ，実際の自然談話データに照合し，統計的な方法で分析することで，その有効性を検証することとしたい。

以下，まずは過去に提案された主な有力と思われる要因の概観を行った上で，簡単に今回使用するデータの説明を行う。続いて各々の要因を実際の発話データの統計的分析により検証し，どの要因がゼロ形出現の的確な予測に関して重要であるのかを判定することにする。

1. ゼロ形「を」：要因の概観

東京語「を」の揺れに関してこれまでになされてきた言語内的要因の提案には，（1）発話のスタイル差（Tsutsui 1984），（2）動詞と目的語名詞句の隣接性（Tsutsui 1984），（3）名詞・代名詞の差(Hosaka et al. 1992)，（4）名詞句の情報性(新/旧情報)（Masunaga 1988)などと多岐にわたる。スタイル差は，改まったスタイルに比べてくだけたスタイルでゼロ形が出やすいことが Tsutsui (1984) の研究によって明らかにされているが，Matsuda (1995) および松田 (1998) は，スタイルの効果が性別や東京都内での居住地域差（山の手/下町）といった話者の社会的属性と交互作用を示すことを明らかにしている。これはつまり，スタイルの効果は社会的要因と分けては考えられない性質のものだということになる。そこでこの論文ではスタイル差を割愛し，それを除いた3つの提案，すなわち言語内的要因に焦点を当てて検討するものと限定し，以下簡単にそれらの概略を述べてみたい。

1.1 動詞と目的語名詞句の隣接性

「を」のゼロ化が格関係の問題である以上，その名詞句の統語的環境が当然問題となる。Tsutsui (1984)，Saito (1985) では，目的語名詞と動詞がこの順序で相互間に何らの要素をはさまずに隣接している場合に，目的語名詞のゼロ形が出現しやすいという観察をしている。Saito (1985) はこれを当時の生成文法 (GB 理論) の格フィルター (Chomsky 1981) により説明しており，Saito (1983) ではまた動詞の隣接性を補うものとして次のような仮説を唱えている。

> 動詞とゼロ形の目的語がたとえ隣接していなくとも，その間に位置する要素が疑問詞でない間接目的語であれば，その文の容認性はさほど低くはならない。しかしこの位置に主語名詞句は来ることができない。
>
> (Saito 1983：254 ff. 筆者による和訳)

これはいわば，S-O-V ばかりでなく，対格名詞と動詞の間に他の要素が挟まる形の S-DO-IO-V (DO＝直接目的語，IO＝間接目的語) という語順であっても，それが疑問詞でない間接目的語 (〜ニ) である限り，文法性は低くないということである。この予測が正しければ，実際の発話中にこのような語順で「を」のつかない直接名詞句が見つかることが予想されるはずである。

Saito の仮説はまた，主語名詞句の存在がゼロ化に関与することも示唆している。もし同一文中に助詞のない主語が明示的に存在するのであれば，聞き手が「を」のゼロ化された「裸」の目的語名詞句を目的語名詞句と判別するのに混乱が生ずることは想像に難

くない。「花子が太郎をぶった」で，二つの名詞句の格助詞がどちらもゼロであるような（「花子φ　太郎φ　ぶった」）を考えれば明らかであろう。実際の談話では，動詞と主語・目的語名詞句の意味的な制約（生成文法の選択制限に当たる）や，談話中の主語の流れ，また日本語において基本語順がSOVであることなどからこの問題は回避されているものと思われるが，同一文中における重複格助詞ゼロ化を回避するといった機能的制約が，予備的メカニズムとしてゼロ化に関わっていても不思議はない。また動詞の目的語に対する選択制限に着目すれば，仮に主語名詞句が裸であったとしても，主語が明示的に文中に存在しない場合よりは，各名詞句間の文法関係の同定は容易なはずである。以上の考察から，動詞と目的語名詞句の隣接性を分析する際に，あわせて主語名詞句が当該文中に明示的に存在するか否かも検討することとした。

1.2　語彙名詞・代名詞の差

対格格助詞「を」が目的語名詞に付くものである以上，当の名詞のさまざまな性質がこの変異に関わっていることは十分予想されることである。その一つは，Hosaka et al.（1992）の提案した名詞・代名詞別である。ここには，15,000文を含むATR対話コーパスをデータとした助詞脱落分析から，名詞形式差が脱落に関わっているという指摘がある。Hosaka et al.（1992）によれば，電話の会話とキーボードを通しての会話の別をスタイルとし，名詞を普通名詞と代名詞に区別して集計した対格格助詞「を」の脱落率は表1のようになるという。実数（表中でカッコ内に表示）が少ないところに不安が残るものの，名詞別によるゼロ形の分布差はそれまでに顧みられていなかったことを考えると，語彙名詞句・代名詞別の提案は十分注目に値する。[注1]

表1
名詞別とスタイル差によるゼロ形の分布
［Hosaka et al.（1992：1252-3）のTables 2，3より］

	スタイル	
名詞別：	電話	キーボード
普通名詞	13.9%（348）	6.0%（70）
代名詞	0.6%（　3）	—

1.3　名詞句の情報性

名詞句の意味的側面については，また語用論的見地からも考えることができる。Masunaga（1988）の提案は，この線に沿ったもので，当該の名詞句の概念がすでに聞き手との共有情報であればその名詞句に付く「を」のゼロ化が可能だという趣旨である。逆に言えば，その名詞句が聞き手にとって新情報であればゼロ化は起こりにくいという

ことになる。すでに聴者が当該名詞概念を把握済みであれば，話し手はその名詞についてはそれほど明示的に標示しなくても，聞き手に理解されることを期待しうる。こうした観点からは，名詞の情報性と格助詞脱落に相関関係を求めるのは合理的な予測であろう。

しかしながらこの仮説に全く問題がないわけではない。その最たるものは，この仮説が「共有情報」「新情報」といった，多分に曖昧な概念で成立しており，具体的文脈で何をもって「共有情報」,「新情報」とするのかが必ずしも明らかでない点である。同様な概念は過去多くの学者によって提案されてきているが[注2]，ここではそのうちで最も妥当と思われる枠組みを提唱した Prince (1981) の，仮定的親近性 (Assumed Familiarity) の考えを採用する。仮定的親近性の立場は，第三者的立場から会話参加者のすべてを知悉したかのように各名詞句の情報性を記述するのではなく，自分の発話する名詞句が聞き手にとってどういう情報上の位置付けがなされるのかについて，話者が信じている(思い込んでいる,仮定している)ものを採用しようとするものである。この立場から，Prince(1981)では，情報性を大きく新情報 (new)，推測可能 (inferrable)，既用 (evoked) の 3 つに分類する。新情報は，それまでの談話に出てこなかったもの(斬新　brand new)，および聞き手の前提的知識と思われるもの (未使用　unused) を指し，既用はすでに談話中で使われたもの (文脈的既用　textually evoked) と共に，談話場面で実際に存在する事物 (状況的既用　situationally evoked) を含む。推測可能はこれらのいずれでもなく，しかしこれまでに使われた概念・表現から聞き手が当然推測できる概念である。例えばすでに同じ談話で「自動車」という名詞句が使われていた場合,「エンジン」というのは,「自動車には必ずエンジンがある」という日常的推論から推測可能という情報のラベルが与えられる[注3]。もし目的語名詞句の情報性が格助詞「を」のゼロ化に Masunaga の主張するごとく関与しているのであれば,「既知＞推測可能＞新情報」の順でゼロ化の割合が高いことが予想されるであろう。

2. 方法論・データ

上述したような要因の中には,例えば Saito の補助的仮説のように,理論的に妥当でありつつも，提案者の文法的直観にのみその経験的基礎を置くために，実際の発話においての実効性が不明なものもある。また，実際に何らかのデータで検証を行ったものであっても，各々が性質の異なる言語データをもとに自らの提唱する制約・要因のみの検証を行っており，他の仮説と共に検証して，自己の提唱する要因の有効性を示そうとする姿勢に欠けていた観がある。現在のように提案が幾つも出されている時点にあっては，大量の自然発話データから「を」が使用されている箇所とゼロ形で出現している箇所を探し出し，おのおのの仮説に従ってまとめた上で，その差の有意性を検定することで仮説の実効性を判断するのが望ましいはずである。

こうした見地に立ち，本論考では基本的な方法論として，（1）自然談話データを用いること，（2）統計的解析にロジスティックモデルを使用すること，の二点を採用することとした。自然談話データは，1988年より1993年にわたり収集した東京語母語話者37名との一対一のインタビューおよび数人の仲間との会話からなるグループセッションの録音からなる。[注4] インタビューはLabov（1966）以来の方式で，モデュール（ネタ集）で補いつつ，話し手から様々なスタイルの談話を誘出する手法である。録音資料からのデータ抜き出しに際しては，目的格を表す「を」およびそのゼロ形のみを記録し，各トークンについて各種言語環境によるコーディングを付した。[注5] 総トークン数は7,701個であり，うち7,529トークンをデータとして採用した。[注6]

こうしたデータの分析では，当然複数要因を検定を交えつつ比較することになる。ここで注意すべきは，このような検定を，「を」の有無を従属変数，そして各要因を独立変数とした分割表を各要因ごとに作成して行うだけでは，不十分であるという点である。「を」の変異では複数要因が絡むことが予想される。さらに自然談話データでは，各要因の組み合わせであるセルの持つトークン数に，顕著な分散が認められるのが普通である。こうした場合に個別の分割表のみで分析してしまうと，各要因の効果について誤った判断に導く可能性がある。[注7] 最も望ましい統計手法は，総ての名義尺度要因の効果を総てのセルにわたり同時に評価しうるようなものでなければならない。この要件を満たすものが，ロジスティック回帰分析（logistic regression）である。

ロジスティック解析は，複数名義変数から，ゼロ化率のように割合で示される目的変数の予測を行う統計法である。日本国内の言語研究での活用例[注8]は少ないが，実は広く社会科学や医学統計で用いられており，欧米の変異理論（Variation Theory）と呼ばれる計量的社会言語学でも長年用いられてきた実績がある。名義変数内のレベル（例えば「情報性」という変数であれば，上で述べたように「斬新」，「推測可能」，「既用」の3つのレベルが存在する）それぞれに重みを算出し，ゼロ形の出現に各要因がどれほど関与しているのかの目安を与えてくれる。ロジスティックモデルはSAS，SPSSなど多くのソフトに含まれているが，ここでの計算にはマッキントッシュ用GoldVarbバージョン2.0（Rand and Sankoff 1988）を使用した。[注9]

3.　検証[注10]

3.1　検証その1：動詞と目的語名詞句の隣接性

まず隣接性の最も簡単な仮説の検討から始めよう。表2は，動詞と目的語名詞が（1）隣接しているか，（2）明示的な主語が文中に含まれているか，の2点でデータを分類しゼロ化率を算出したものである。「確率」欄にはGoldVarbの算出した重みを入れてある。この値が0.5を境に，それ以上であればその要因がゼロ化を促進する方向に，逆に0.5以下であればゼロ化を阻害するように働いているものと解釈できる。また，有意性は

対数尤度法によって計算した，直下欄のカテゴリーとの差異に関するものである。[注11]

表2
動詞と目的語名詞句の隣接性および明示的主語の有無による
ゼロ形の分布(1)

	確率	ゼロ形%	実数	有意性
隣接 主語あり	0.555	63	519/824	N.S.
隣接 主語なし	0.539	59	3,385/5,783	
非隣接 主語あり	0.316	35	58/166	$p<0.05$
非隣接 主語なし	0.220	24	184/756	
計		55	4,146/7,529	

*有主語カテゴリー同士(隣接・主語あり vs. 非隣接・主語あり) は0.1%レベルで有意差あり。
*無主語カテゴリー同士(隣接・主語なし vs. 非隣接・主語なし) は0.25%レベルで有意差あり。

(1) [隣接，主語あり]
その間に，**女房が**，ま，**フライもんのパン粉をつけて揃**えてると…[9121-0-503][注12]

(2) [隣接，主語なし]
うちへ来てもねえ，もうね，**仏様ゐ拝んでね**
[8802-0-159]

(3) [非隣接，主語あり]
でも**あたし達は，替え糸っていうのを**常に三味線の所に**くっつけて**…[8905-0-575]

(4) [非隣接，主語なし]
箸を右手で**持って**…[8917-0-366]

ゼロ形の予測について，この変数全体は0.1%水準という高水準で有力な変数であることが判明している(Matsuda 1995)。表中で顕著な差が出たのは隣接か否かであり，対して主語の有無は目的語と動詞が非隣接の場合にのみ5%域で有意である。有主語文同士，無主語文同士の検定結果でも隣接性の差が極めて高い有意差となって現れている。この段階で，まず隣接性が有力要因であり，同一節内主語の有無は補助的性格であることがわかる。Tsutsui (1984) の観察は自然談話の実態を的確に捉えていたわけである。

主語の役割に目を転ずると，補助的性格とはいえ非隣接文で同一文中主語の持つ機能が明らかになったことの意味は大きい。表の数字を使って計算すると，自然談話データ

の実に 87.75%((824+5,783)/7,529)で動詞と目的語名詞句が隣接している。これなら聞き手が「他動詞文では動詞の直前を目的語名詞とせよ」という解釈上の戦略を持っていても不思議はない。しかしこの隣接性が破られた場合，聞き手は別な解釈戦略が必要である。主語の存在は，こうした理解が比較的困難な文について解釈上の手がかりを聞き手に与えるような機能を果たすことになる。よって非隣接文においてのみ主語の有無が有意であるのは，極めて合理的な分布なわけである。

さて，ここで一見非隣接環境であるにもかかわらずゼロ化を許容する，2つの「例外」に触れておきたい。一つは，間に挟まるのが「一つ，二枚」などの数量詞である場合であり，もう一つはその挟まる要素がオノマトピアである場合である：

（5）　もののない時だからねえ，あめ玉φ**ひとつ**もらったって，こうやってお辞儀する
[8802-1-330]

（6）　じゃ，ビデオφ**二個**あげよう。一個壊れてるの。
[8806-1-007]

（7）　ティッシュの箱φ**くるくるくるくる**回してね…
[8807-0-482]

（8）　弟の部屋φ**どんどんどんどん**叩いて…[8804-1-525]

(5)(6)については，「ひとつ」「二個」といった数量詞が，そして(7)(8)ではオノマトピア(「くるくるくるくる」「どんどんどんどん」)が例外的データとして出現しており，こうした文型ではまた内省でもゼロ助詞が許容されるように思われる。とすれば，単なる偶然としてではなく，何らかの形でシステマティックな説明がなされねばならない。ここでは，異分析による説明を試みたい。[注13]

Gunji and Hasida（1998）では，GB 理論で通常数量詞遊離（Quantifier Float）としてひとまとめにされる数量詞[注14]を以下の3種に分類している：

（9）　名詞句前置型（Prenominal）：すべての学生

（10）　名詞句後置型（Postnominal）：学生三人が…

（11）　名詞句外置型（Extranominal）または副詞句（Adverbial）：学生が三人笑った

名詞句前置・後置型では数量詞は名詞句の中に含まれているが，外置型では名詞句とは別個の，独立した副詞（句）をなしている。さて「ビデオ二個あげよう」という発話は，

（12）　[ビデオ　二個（を)]$_{NP}$ [あげよう]$_{V}$

（13）　[ビデオ（を)]$_{NP}$ [二個]$_{ADV}$ [あげよう]$_{V}$

の2通りで分析が可能である。つまり，名詞句後置型(12)と名詞句外置型(13)の間で構造上の曖昧性が存在するわけである。ここで格助詞「を」がゼロでなければ，「ビデオを」と「二個」との間に「明日」といった副詞が挿入可能であることから（[ビデオを]$_{NP}$ [明日]$_{ADV}$ [二個]$_{ADV}$ [あげよう]$_{V}$）外置型の方が正しいことがわかる。しかしゼロ助詞の場合，こうした副詞句挿入を行うと非文になるため(*ビデオφ　明日　二個　あげよう)，副詞句挿入テストでは構造的判別は無理である。仮にこれが(12)のような後置型構造であれば，目的語名詞句と動詞は直接隣接の関係になり，これはまさに表2で見たようにゼロ助詞化可能な環境である。そこで(6)のような文では，話者が発話時に当該部分を後置型構造に再分析しているとすれば，こうした文を規則の例外とせず，これまでと同様な説明原理で扱うことができることになる。

同じことはオノマトピアの例にも適用できる。上例で見る通り，動詞に直接先行するオノマトピアは，いずれも一種の様態副詞として動詞を修飾している。そしてそれらのオノマトピアは，後続動詞の動作を特定化することで，[オノマトピア＋動詞]という形の動詞に異分析されているものと考えることも可能である。例えば，「くるくるくるくる回して」であれば，そういった回転そのものを意味する動詞であり，「どんどんどんどん叩いて」であれば，単に叩くことを意味するのではなく，「ある特定の様子で叩く」ことを意味する，という形で意味的に特定化された動詞ということである。こうした異分析を行うと，「目的語名詞句＋オノマトピア＋動詞」という連続は，「目的語名詞句＋異分析動詞」となって二者が連続することにより，ゼロ形が使用可能な環境が醸成されることになる（(14) 参照)。

(14)　オノマトピア＋動詞の異分析

[ティッシュの箱]$_{NP}$ [くるくるくるくる]$_{ADV}$ [回してね]$_{V}$

⇒[ティッシュの箱]$_{NP}$ [くるくるくるくる回してね]$_{V}$

こうした異分析が話し手の側で行われているとすることで，一見例外的環境でゼロ形が出現することが可能と思われる。

さて，次にSaitoの補助仮説の検討に移りたい。Saitoの2つ目の仮説を実証するには，非隣接文について，目的語・動詞間に間接目的語が生起しているかどうかでデータを分類すればよい。しかしSaitoの仮説はこの位置に主語は生起していないことを予測しており，また非隣接文での主語の有無の重要性もすでに確認済みである。そこでこれら2つを組み合わせて，表3にあるように分類した。なお，{非隣接，間＝間接目的語，主語あり}というカテゴリーが欠落しているのは，このようなデータが全データ中3件と僅少であるためにデータからはずしたことによる。表3の合計が7,529でなく7,526であるのも同じ理由である。[注15]

表 3
動詞と目的語名詞句の隣接性および明示的主語の有無による
ゼロ形の分布(2)

	確率	ゼロ形%	実数	有意性
隣接	0.541	59	3,904/6,607	
非隣接 間＝間接目的語 主語なし	0.199	21	13/61	N. S.
非隣接 間≠間目 主語なし	0.224	25	174/698	$p<0.05$
非隣接 間≠(主語，間目) 主語あり	0.322	36	42/117	N. S.
非隣接 間＝主語	0.259	28	13/46	
計		55	4,143/7,526	

＊〈非隣接，間＝間接目的語，主語なし〉と〈非隣接，間＝主語〉間の差は有意ではない。

(15)　[非隣接，間＝間接目的語，主語なし]
やっぱり自分の知識って言うか，**それを人にしゃべって**…[8919-1-363]

(16)　[非隣接・間≠間接目的語，主語なし]
ただ**何かを一時期一生懸命やって**，その，大人になってったほうがいいんじゃないかなあと思うんですよね [9121-1-229]

(17)　[非隣接，間≠間接目的語・主語，主語あり]
そいで，ま，**お父さんがね，あたくしφ何かにつけ未だに呼んで下さるんですけどね**…[9103-0-019]

(18)　[非隣接，間＝主語]
そうすっとぴゃーって**からだを自分が回してね**，帯をぴたって締めちゃうの [9104-1-377]

隣接文では主語の有無に左右されずにゼロ形が出現しやすいが，非隣接文では逆に，たとえ間にどんな要素が入ろうがおしなべてゼロ形が出現しにくい環境となっている(確率が総て 0.5 以下であることに注意)。Saito の仮説とは裏腹に，間接目的語が動詞と直接目的語の間に入る場合が最も重みが低く，むしろゼロ形が最も出現し難い環境を形成している。対数尤度法による検定結果を見ても，重要なのは隣接性であることが確かめ

られる。すなわち何が間に入っているかは，上記の「例外」を除いては無関係である。結論として，間接目的語に関する Saito の補助仮説は反証されるのである。

3.2 検証その 2：語彙名詞・代名詞別

目的語名詞を形式差で分類してゼロ形のパーセンテージを示したのが表 4 である。(19)～(22) には各カテゴリーの実際の出現例を掲げた。疑問代名詞が 72%ものゼロ化率を示すのに対して名詞節は 36%とちょうど半分のゼロ化率を示す。語彙名詞と代名詞間には 0.1%域での有意差が見られ，確かに Hosaka らの報告した通り「語彙名詞>代名詞」という差が存在する：

表 4
目的語名詞句の統語的カテゴリー差によるゼロ形の分布

	確率	ゼロ形%	実数	有意性
疑問代名詞	0.651	72	121/168	
語彙名詞	0.526	59	3,200/5,459	$p<0.001$
代名詞	0.435	46	653/1,418	
名詞節	0.345	36	172/484	
計		55	4,146/7,529	

(19) [語彙名詞句]
それでみんな**旗**ϕ振ってさ… [8606-0-445]

(20) [代名詞]
釘の，五寸釘のこんな奴があるでしょ，**あれを**電車へこう落としてさ [8925-1-091]

(21) [疑問詞句]
うちの方は，**なに**ϕやるのかなあ [9119-0-158]

(22) [名詞節]
その辺に生えてる草をつんで… [9028-0-101]

ではここから，Hosaka 等の仮説が，いわば疑問代名詞や名詞句を含んで拡大された形で実証されたものと即座に結論付けられるだろうか。実は Hosaka 等の仮説が正しいことを示すためには，名詞句の情報性もあわせて検証しないと不十分なのである。この理由を述べる前に，まず情報性の検討を行いたい。

3.3 検証その 3：目的語名詞句の情報性

目的語名詞句の情報性によってデータを整理すると，表 5 のようになる。ここでは，

上掲の Prince による分類の最上ランクである新情報，推測可能，既用の 3 カテゴリーでまとめてある。データが推測可能とそれ以外と別れることから，情報性がゼロ形出現の一要因と考えられそうである。しかし Masunaga の仮説では，既用のゼロ化率が少なくとも新情報や推測可能よりも高くなければ，仮説の実証とはなり得ないはずである。自然発話データをより精緻化された情報性カテゴリーで分類した今回の結果は，Masunaga の仮説を反証するかのようである。

表 5
目的語名詞句の情報性によるゼロ形の分布

	確率	ゼロ形%	実数	有意性
新情報	0.502	56	1,871/3,323	N. S.
推測可能	0.543	63	506/804	$p<0.025$
既用	0.488	52	1,769/3,402	
計		55	4,146/7,529	

＊既用と新情報間の差は有意ではない。

3.4　名詞・代名詞別と情報性の統合

ここで，名詞句の統語的カテゴリーと当該名詞句の情報性の 2 要因の関係について考えてみたい。前節までの考察からは，目的語名詞句の形式差は重要だが，その情報性は重要ではないということになる。しかしながら，一般にこれら二者間には高い相関関係が見られる。すなわち「疑問詞でない名詞句の情報性は斬新ではない」とか「代名詞は（たいてい）斬新ではない」といった関係が存在するわけである。つまりどちらかのカテゴリーが決定されるともう一方のカテゴリーの選択に大きな制限がかかってしまう。こうした従属性を放置したまま分析を進めると，ゼロ化の割合が本当はどちらの要因による結果なのか判別が付かない。これを回避するには，名詞形式差と情報性を組み合わせて新要因を作成すればよい。この分析結果を示したのが表 6 である。

表 6 には，次の 3 点が認められる：

1. 代名詞でも，人称代名詞と疑問詞（「誰を」，「何を」等）とは異なる分布を呈し，後者は極めてゼロ形で実現されやすいが，逆に前者は一概にゼロ化されにくい部類に位置する。
2. 代名詞に比して語彙名詞句は比較的ゼロ化されやすく，ちょうど疑問詞と代名詞の中間に属する。
3. 情報性について検討すると，確かに推測可能な語彙名詞句は新情報や既用語彙名詞句に比べてゼロ形とより深く結びついているように見える。しかし代名詞ではこの順序が崩れており，一貫した効果を持つものではない。

表 6
名詞・代名詞別と目的語名詞句の情報性によるゼロ形の分布

	確率	ゼロ形%	実数	有意性
疑問詞	0.643	72	121/168	
推測可能語彙名詞	0.569	64	494/771	$p<0.05$
新情報語彙名詞	0.525	59	1,565/2,651	N. S.
既用語彙名詞	0.514	56	1,141/2,037	$p<0.01$
既用代名詞	0.448	47	582/1,244	N. S.
推測可能代名詞	0.371	41	71/174	
名詞節	0.334	36	172/484	
計		55	4,146/7,529	

＊推測可能語彙名詞と推測可能代名詞間には$p<0.001$ レベルで有意差あり。

1，2からは，Hosakaの仮説が確認されたことになるが，代名詞の中で代名詞と疑問詞が全く異なった振る舞いをすることがわかる。一方3から見るように，情報性は一貫した効果を持つとは言い難い。表6の分布を大きく左右に分割しているのは，あくまで名詞節/代名詞/語彙名詞/疑問詞という形式差であり，情報性による差はそれには遥かに及ばない。こうした考察からMasunaga仮説は否定されねばならないことになる。

ところで，代名詞と語彙名詞の区別による格助詞「を」ゼロ化の差は，言語学的にはどのような説明が考えられるだろうか。様々な言語について名詞句の語彙名詞・代名詞別と格標示の有無の相関を調べると，以下の3つのタイプしか存在しないかのように思われる：（1）接辞・補充法（suppletion）による明示的な格標示を持ち，語彙名詞句・代名詞の両者に格標示が見られる（英語，ガロ（Garo）語，シエラ・ミウォック（Sierra Miwok）語，セルボ・クロアチア語，タスマニア（Tasmanian）語，朝鮮語，バスク語など），（2）接辞・補充法による明示的な格標示を持つが，代名詞に格標示が付く一方，語彙名詞句には付かない（オジブワ（Ojibwa）語，ナバホ（Navajo）語，ポーニー（Pawnee）語，フランス語など），（3）接辞・補充法による明示的な格標示を持たない（カランカワ（Karankawa）語，ゴアジロ（Goajiro）語，中国語，ヘイシャン・クリオール（Haitian Creole）語，ベトナム語など）。つまり，ある言語が明示的な格標示を持つ場合，代名詞につき語彙名詞に付かないという類型論的パターンは広く世界の言語に見られるものの，逆（すなわち格標示が語彙名詞に付き代名詞に付かない）のパターンは存在しないか，極めて珍しいもののようである。[注16] 東京語に見られる名詞句形式による差は，こうした間言語的傾向の反映として説明が可能かも知れない。

4. 結　論

以上の検証は，以下のようにまとめられよう：

1. 東京語「を」格のゼロ化には，隣接性が大きな要因となる。しかし，一旦隣接性が破られた場合，間にどのような要素が入るかによっては何らの影響を受けない。また補助的な効果として，同一文中に主語が含まれているか否かが関わる。すなわち Tsutsui (1983)，Saito (1985) の仮説は支持されるが，Saito (1983) の仮説は破棄される。
2. 名詞・代名詞別はゼロ化に関わるものであり，Hosaka et al. (1992) の仮説は裏付けられる。しかし同じ代名詞でも，疑問詞は異なる振る舞いを示す。
3. 情報性がゼロ化に一貫した形で関わっているという Masunaga (1988) の仮説は，破棄される。

別な観点から見ると，ゼロ化要因は目的語名詞句と動詞の隣接性，目的語名詞句の代名詞性など，統語的・形態論的なものであるとも解釈できる。換言すると，いわば発話の表層的連続を見ただけで，任意の目的語名詞句が「を」とゼロ形のいずれかを伴うかが予測できそうだということである。

実際に GoldVarb プログラムにて最低限必要な要因を選択してみると，言語内要因では隣接性に加えて，名詞句の形式差（語彙名詞・代名詞の別）で十分な予測が可能である (Matsuda 1995)。東京語の実際の変異にはこれに加えて社会的要因が絡むわけだが，言語変異の全体を捉えるにはまず言語内的な要因を的確に押さえる必要がある。本稿はその一端を示すことを目指したものである。現段階ですでに不十分であることを承知の上で，今後の課題を幾つかあげて，本論文の結びとしたい。

- 談話中の連続する文において，前文でゼロ化が起きると後続文でもゼロ化が起きやすくなる可能性が高い。心理学で言うプライミングに似たメカニズムである。この関わりを詳細に見る必要がある。
- 上で検討した仮説の他にも，皆島 (1993) による有生性と定性の要因がある。前者については，Matsuda (1995) で報告したように，東京語ではゼロ化の有力な要因とは考えられないようである。一方『方言文法全国地図』第 6,7 図を見ても明らかなように，実際に有生性は多くの方言でゼロ化の要因となっている。この差が説明される必要がある。

謝辞　本稿は，国語学会平成 10 年度春季大会（於白百合女子大学）における口頭発表に基づいている。発表に際して，杉本武先生，三宅知宏先生，鷲岡昭夫先生，宮治弘明先生から，そして本

原稿に対しては伊土耕平先生，中村優氏から有益な御助言・御批判を頂いた。また自然談話データはすべて話者の方々の御好意によって採らせて頂いている。深く感謝申し上げたい。本稿の責任は松田個人のものであり，執筆には平成10・11年度文部省・学術振興会科学研究費補助金（奨励研究（A），課題番号：10710261，「言語変化・変異における認知的要因の探求と他要因との関わりの数量社会言語学的研究」）を受けている。

注1　但し，本研究ではHosaka et al.のように普通名詞ではなく，語彙名詞句(Lexical NP)と代名詞，という対立で捉える。語彙名詞句ということで，固有名詞や複合名詞も包含しうるからである。

注2　類似概念についてはPrince（1981），定延・熊谷・苅田（1999）が詳しい。

注3　新情報，推測可能名詞共にさらに下位分類が存在するが，これらについては当面関わりがないのでここでは省略する。

注4　資料収集に当たっては，日比谷潤子氏の協力を仰いでいる。

注5　Tsutsui (1984) にもある通り，目的格以外の「を」の場合にもゼロ形が使われることもあるが，明らかにそのゼロ化率は異なり，同列に扱うのは好ましくない。

注6　フィールドワークの詳細については，Matsuda（1995）を参照。

注7　こうした問題については，例えばFienberg（1989：50 ff.），エヴァリット（1977：73 ff.）を参照。

注8　例えばHibiya（1988），Matsuda（1993），Hibiya（1995），Matsuda（1995）参照。またRietveld and van Hout（1993）には，言語データに即したロジスティックモデルの解説がある。

注9　http://www.crm.umontreal.ca/~sankoff/GoldVarb_2_1.sea.hqx より入手可能。

注10　以下の表で掲げる表の確率値は，データの予測における最良モデル(隣接性，名詞形式差，話者居住地×スタイルの複合要因の3つを含む）を基にしている。例えば表2であれば他2要因はそのままにして隣接性のみに適切な変更を加えており，表5ではこれら3つに情報性を加えて計算した結果を示している。

注11　ロジスティックモデルでは，各モデル毎に対数尤度が計算される。ある要因内レベルa，b間の有意性を見るためには，a，bを区別したモデルと2つを1つに合併したモデルそれぞれの対数尤度をまず計算し，二値間の差を2倍する。この値が自由度1のカイ自乗分布に近似することを用いて検定が可能である。

注12　カッコ内はデータ番号を示す。

注13　以下の分析については，郡司隆男先生，杉本武先生，三宅知宏先生の御教示に得るところが大きい。

注14　Gunji and Hasida（1998）の用語では，測量詞（measurement phrase, MP）とされているが，ここでは混乱を避けるため慣用に従った。なおGB理論での扱いについては，Miyagawa（1989）を参照。

注 15　この 3 文は以下の通り：

イーちゃんも言いたいことφヒトミに言ってんじゃん［8805-0-526］

チーの悪口をみんなに言いふらすのよ，イーちゃんが［9001-0-020］

だからあたしはそれφ先生に言ったのよ［9138-0-670］

注 16　こうした分布の詳細については Matsuda（1995）を参照。

参考文献

エヴァリット, B. S.（山内光哉監訳，弓野憲一，菱谷晋介訳）. 1977.『質的データの解析：カイ二乗検定とその展開』. 東京：新曜社.

国立国語研究所（編）. 1989.『方言文法全国地図』. 東京：大蔵省印刷局.

定延利之・熊谷吉治・苅田修司. 1999.「旧情報と新情報」. 音声文法研究会（編）『文法と音声II』. 東京：くろしお出版. Pp. 127-148.

松田謙次郎. 1998.「東京語「を」格ゼロマーク化の社会言語学的解釈」. *Shoin Literary Review* No. 31, 49-64.

皆島博. 1993.「日本語格助詞「を」の省略について――有生性と定性の関与の可能性――」.『言語学論叢（松本克己教授退官記念論文集）』特別号，58-71.

Chomsky, Noam. 1981. *Lectures on Government and Binding*. Dordrecht: Foris Publications.

Fienberg, Stephen. 1989. *The Analysis of Cross-Classified Categorical Data. Cambridge*: MIT Press.

Gunji, Takao and Koiti, Hasida. 1998. Measurement and Quantification. In *Topics in Constraint-Based Grammar of Japanese*, edited by Takao Gunji and Koiti Hasida. Boston: Kluwer Academic Publishers. Pp. 39-79.

Hibiya, Junko. 1988. *A Quantitative Study of Tokyo Japanese*. Doctoral Dissertation, Department of Linguistics, University of Pennsylvania.

———. 1995. The Velar Nasal in Tokyo Japanese: A Case of Diffusion from Above. *Language Variation and Change* 7: 139-152.

Hosaka, Junko, Takezawa Toshiyuki, and Uratani Noriyoshi. 1992. Analyzing Postposition Drops in Spoken Japanese. *The Proceedings of the International Conference on Spoken Language Processing 1992*. Pp. 1251-1254.

Labov, William. 1966. *The Social Stratification of English in New York City*. Washington, D. C.: Center for Applied Linguistics.

Masunaga, Kiyoko. 1988. Case Deletion and Discourse Context. In *Papers from the Second International Workshop on Japanese Syntax*, edited by W. J. Poser. Stanford: CSLI. Pp. 145-154.

Matsuda, Kenjiro. 1993. Dissecting Analogical Leveling Quantitatively: The Case of the Innovative Potential Suffix in Tôkyô Japanese. *Language Variation and Change* 5: 1-34.

———. 1995. *Variable Zero-Marking of (o) in Tôkyô Japanese*. Doctoral Dissertation, University of Pennsylvania.［Technical Report IRCS-96-20, Institute for Research

in Cognitive Sciences, University of Pennsylvania] .

Miyagawa, Shigeru. 1989. *Structure and Case Marking in Japanese.* New York : Academic Press.

Prince, Ellen F. 1981. Toward a Taxonomy of Given/New Information. In *Radical Pragmatics*, edited by P. Cole. New York : Academic Press. Pp. 223-255.

Rand, David and Sankoff, David. 1988. *Goldvarb Version 2 : A Variable Rule Application for the Macintosh.* Montréal : Centre de Recherches Mathématiques, Université de Montréal.

Rietveld, Toni and Roeland van Hout. 1993. *Statistical Techniques for the Study of Language and Language Behavior.* Berlin : Mouton de Gruyter.

Saito Mamoru. 1983. Case and Government in Japanese. In *West Coast Conference of Formal Linguistics* 2, edited by M. Barlow et al. Stanford : Stanford Linguistics Association. Pp. 247-259.

————. 1985. *Some Asymmetries in Japanese and Their Theoretical Implications.* Doctoral Dissertation, Department of Linguistics and Philosophy, MIT.

Tsutsui, Michio. 1984. *Particle Ellipses in Japanese.* Doctoral Dissertation, Department in Linguistics, University of Illinois at Urbana-Champaign.

——神戸松蔭女子学院大学助教授——

(1999 年 8 月 4 日　受理)